

## 堅田路の文化財を尋ねて

佐伯史談会婦人部第一回の催

去る四月三日（木）うらかな春の日ざしを受け、桜の花のほころぶ堅田路の文化財を尋ねるため、西野橋広場に集った婦人部は三十余名、それに高木会長、羽柴先生等十余名の男性が参加、なごやかな自己紹介をして早速歩き出す。

眺望のよい新設の西野橋上で、そよ風に吹かれながら、今日の大体のコースの説明をうける。

これから歩く西野——府坂——石打——波越は、堅田地区でも最も石造文化財の多いところであり、佐伯惟治公の子千代鶴君が自創した所でもあり、史跡と文化財の里であるとの説明に、早くも一行の心はずむ。

田の中の棕の巨木の下に、立派な石の塔がたっている。清田先生の精しい説明で石幢（六地藏塔）と知ると共に、昔の人の信仰の深さを思い、今まで何気なく見過ごし

て来たものが、そんな大切なものであったのかと知る。そのそばに小さな数箇の石塔が立っている。その中の高さ四十糎程の一番粗末な石塔が、市指定文化財の庚申塔で天正四年の銘があり、県内でも屈指の古いものであるという。聞かなければ見向きもしないような、ありふれた小さな石の塔である。

ここから百米程の山裾に「長池」という池があり、千代鶴の死を悲しんだ乳母が身を投じて後を追った池という。しかしその池も、三、四年前の堅田川改修の時に埋立てられ、今はゲートボール場になっていると言う。

西野の家並みを過ぎると間もなく、数本の巨杉を中心にこんもりと茂った小さな森がある。ここを村人は「お塔さん」と呼んでいる。ほの暗い木陰に佐伯惟治父子の墓があり、立派な笠地蔵もある。何人かの男

性は、墓の側面の文を写し取っていた。史談会の人々の熱心さに頭が下がる。岩田先生の千代鶴自刃の悲話に涙を催す。野の花をそっと供える人もいた。

時間の都合で、府坂はす通りして石打につき。惟治公を祀る此花咲栄神社に詣でる。会員の清松さんが、お茶や密柑を用意して待っていて下さる。咲き誇る桜の下で、わざわざついて下さったつきたてのお餅をおいしく頂きながら、弁当を広げる。

石打の滝はすばらしい、部落から一畑たらずの近い所に、こんな立派な滝があったのかと驚く。二、三年前までは、大樹がうっそうと茂り、もっとすばらしかったと言うが、おしいことに周りの山を切る時に、滝の周囲の大樹も大部分切られたという。もとの姿になるにはまた長い年月を要するであろうに。

石打の公民館の側に惟治父子の供養塔と大きなお地藏様がある。ここでもお塔さんと呼ばれ花が供えられている。佐伯惟治公は堅田で生きているのだなと思う。

谷川のはとりには、石打梅林の名残りの古木が点在している。昭和十八年の大水害

で、有名な石打梅林は壊滅的狀態になってしまっただという。

由緒ある波越の常楽寺も、今は無住庵となっていて。ここには立派な秘仏の観音像があり、お堂にかけてあった罅口は「文安四年願主惟直」と銘がある貴重なもので、市指定文化財であるが、無住になったので盗難を恐れて、市教育委員会に保管して、代りに模造品を掛けてある。苔むした五輪塔や墓石が僅かに昔を語っている。

見学はここで終り、会員小寺さんの御宅



に案内される。開け放された座敷には御馳走が並べられている。一同御馳走になり、その上花や密柑のお土産まで頂き、恐縮しておいとまをする。

途中の行き届いた案内といい、清松さん小寺さんの心尽くしの御接待といい、史談会でなければ味えない、心暖まる、楽しい思いでいっぱいであった。ほんとうによい一日であった。これからは石造物をみる目が違ってくるであろう。「今日はほんとうに楽しかった。早く次のこんな会を催してほしい」というのが参加した会員の一致した言葉であった。

(塩月)

### 県南初の万葉歌碑

弥生町の「歴史と文化を語る会」と「短歌会」は万葉歌碑を建てる会を結成して、町内有志や、町出身者から寄附金をあつめ町役場の広場に約四トンの真石に黒花崗岩の額入り仕上げ歌碑を建立し、その除幕式を五月一日盛大に挙行した。歌は豊後の国の白水郎の歌で佐伯地方縁りの唯一首の万葉歌である。

紅に染めてしころも雨ふりて

匂ひはすともうつろはめやも

(あなたに対する私の気持は何時までも変わりません)

